企画展 八朔祭屋台飾幕・幔幕展

九月一日の八朔祭りで巡行される屋台には、**水引幕**(屋台前方上部)・**泥幕**(屋台前方下部)・**後幕**(屋台後方外側)・**中幕**(屋台後方内側)という、四種類の飾幕が取り付けられます。これらは、江戸時代の文化・文政期(一八〇四～一八二九)ころにつくられたものといわれ、舶来の緋羅紗地に金糸・銀糸などで刺繍を施した豪華なもので、織物産業で栄えた谷村の繁栄ぶりを現在に伝えています。

しかし、長い年月を経て傷みがはげしくなったため、昭和四十八年に保存会が発足し、現ミュージアム都留館長で染織研究家の山辺知行さんの指導のもと、補修・復元を行ってきましたが、今年七月、下町水引幕「注連縄」が完成し、二十年以上にわたった修復事業は一応の終結を迎えました。

今回の飾幕展では、仲町後幕「桜に駒」や、新町後幕「鹿島踊り」などに加え、郷土画家・五十嵐城南筆の下町の幔幕(会所の周りをおおう長い幕)も展示します。

また、八月にミュージアムで開催されました「夏休みチャレンジ教室～つくろう！きみのオリジナル屋台」で子供達が製作した、オリジナル屋台模型も、あわせて展示します。

都留市の歴史文化を代表する、これらの貴重な飾幕を、この機会に、ぜひ問近でご覧ください。

仲町後幕「桜に駒」

会　期　9月8日(金)～24日(日)

開館時間　午前9時～午後4時30分
(入館は4時まで)

休館日　毎週月曜日・祝日の翌日
第三火曜日(19日)

入館料

一　般	300円(210円)
高校・大学生	200円(140円)
小・中学生	100円(70円)

(　)内は、20名以上の団体料金

新町後幕「鹿島踊り」

次回企画展
『本間正英展』
―バリ島の風俗を描く―

会　期　10月3日(火)～22日(日)

いきいきプラザ都留に展示されている本間さんの作品
「家　族」

館内燻蒸のため
9月26日(火)～30日(土)
休館します

問合先　都留市博物館
「ミュージアム都留」
☎(45)8008
☎(45)8608

ミュージアム都留寺子屋講座より

第三回芭蕉月待講座の要旨をご紹介します。

交流の実態 ―連句鑑賞若干―

芭蕉が泰安寺において詠んだと思われる、次のような句があります。

松風の落葉か水の音涼し　『蕉翁句集』

松の木を渡る風の音と、桂川の水音を重ね合わせた句ですが、「松風」にはともに響き渡る風流な人間関係。つまり芭蕉と芭蕉を谷村に招いた高山樂塢との親密な関係が込められていると思われます。

宗端の句集『松の宴』には、芭蕉の制作した机「松風の文台」があるとのうわさを聞いた宗端が、川越に高山家を訪ねた時の状況と、文台の絵が書かれています。ここにも「松風」の言葉がでてきます。

当時(天和のころ)は、漢詩文調の俳句が流行であり、漢詩の教養を素地として、句のやりとりが行われました。この時樂塢の詠んだ句に、

弦なき琵琶にとまる鶯

という句がありますが、この「弦なき琵琶」は、陶淵明の「無弦琴一張を蓄え、酔うて適するごとくに、すなわち撫弄して以て其の意を寄す」という漢詩のなかの、「無弦琴」になぞらえたものと思われます。樂塢の漢詩の教養があらわれた句です。

また、谷村で成立した連句のなかに、次のようなものがあります。

笠面白や卯の実村雨　一晶
散蛍沓に桜を払らん　芭蕉

「笠面白や」の句は卯の実が笠にばらばらとあたる様子を、「村雨」にたとえたものです。続く「散蛍」は、蛍が飛びかっているのは、沓で桜を払っているようだ、の意味です。『詩人玉屑』に載っている「笠は重し呉天の雪、鞋は香し楚地の花」を踏まえた句で、呉は中国の北の国、楚は南の国であり、この旅の勧めともいうべき詩句を芭蕉は好んでいました。

谷村においてこの句にこだわったということは、やはり谷村への来訪を芭蕉は旅ととらえていたのではないでしょうか。この一年後、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅に出ます。谷村への来訪はのちの旅への序章であり、のちの芭蕉をつくったといえます。

第五回芭蕉月待講座

秋元家・高山家のその後 ―後代俳人の顕彰運動―

日　時　9月19日(火)　午後6時30分～7時30分